

(一) 長尾城

敷根から亀割峠を登り、都之城に向う旧国道。現在の塵芥処理場の左側にそびえ立つ天嶮の山城がある土地の人は単に城山と呼んでいる。これが県下有数の要害を誇る長尾城である。四方を断崖に囲まれ、高さ約二〇〇メートル城の周囲は妬く二三〇メートル、本丸・西の丸・三の丸跡が現存している。西の丸の西は深い凹地があり、その西に陣の平と呼ばれる台地がある。此の台地は、城の大手口の西の取添えとなつている。現在南の麓から、陣の平の下を通り、本丸に通ずる険しい細い道がある。本丸と三の丸の間で地形は大きく二つに分かれ、溪谷が通じ、その谷に泉が湧き出て、下は船川と呼んでいたそうである。この

あたりは、城の搦手からめてと想像され、城の水の手となつていたと思われる。本丸を挟んで、

高さ三〜四メートルばかりの曲輪くまわに囲まれた数箇所の砦があり、それぞれの間は深い堀切で区切られている。本丸曲輪くまわの一段高い所に、軍神応神天皇、神功皇后を祀つた若宮神社の跡があり数個の石塔や石碑が朽ちた姿で残っており、山の神の石碑もある。これは城の鎮守として、お祀りしてあつたものである。本丸から東の三の丸との間の北側には、城の屋敷跡と考えられる平地もあり、又、馬場と思われる跡もあり、城士の屋敷の境界とした錦竹の藪も方々に残っている。若宮神社は現在門倉の医師神社の所領となつている。面積は約三・五アールでその他の土地は民間人の所有となつている。この城は、大隈地方か或は都城地方から、国分平野に進出しようとする

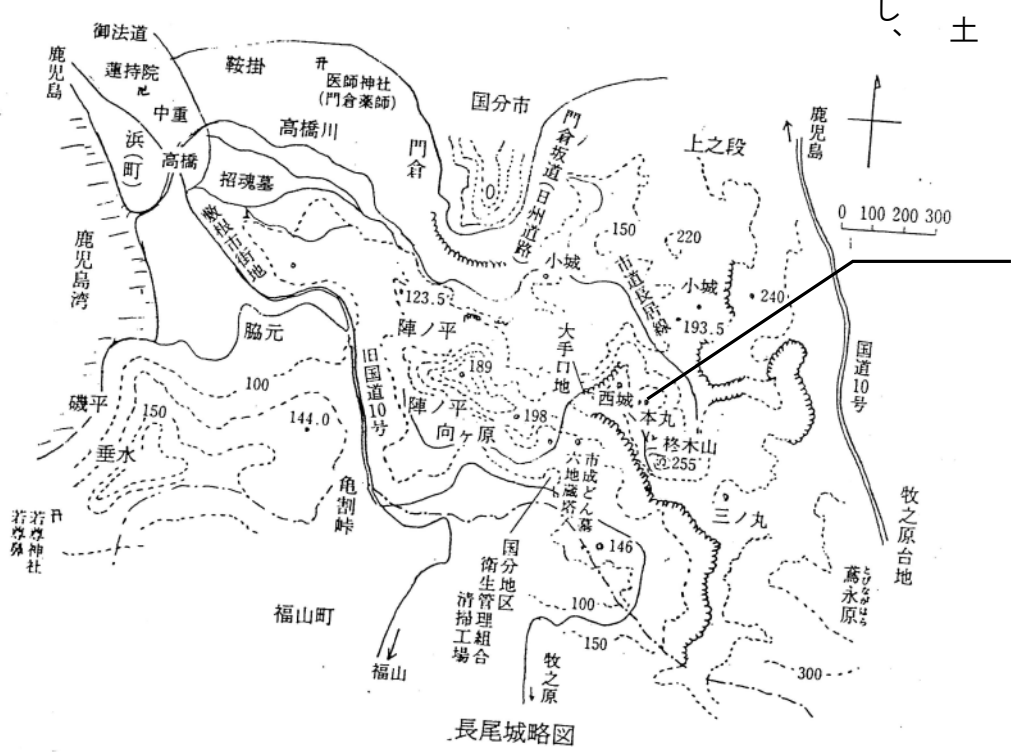
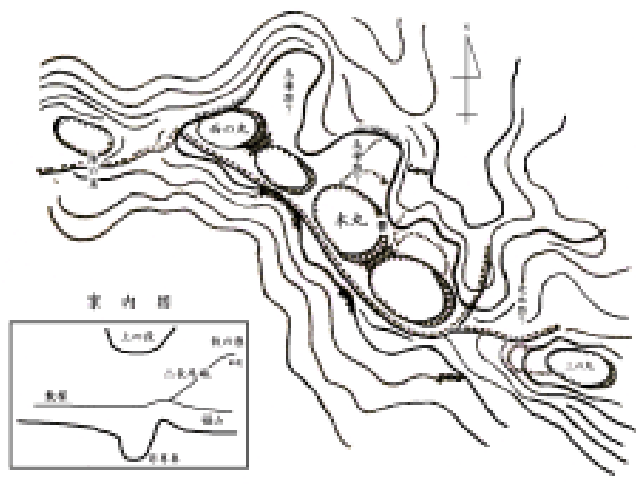
場合、その出口を押さえて、実に見事な地形の利用であると感嘆させられる。

此の城は、約四〇〇年の間、敷根氏代々の居城であつた。従つて別名敷根城とも呼ばれている。敷根氏の祖国房は、清和天皇の末流、大江山酒吞童子退治で有名な、源頼光の子孫で、清和源氏の名門土岐氏に発している。土岐光信より九代土岐安基の息男が国房で、元暦元年、(一一八四)に小河内敷根の領主となつた。その後、何かの事件があり、一時球磨(人吉地方)に走り、次の頼房の代に再び敷根に帰り、その時から土地の名をとり敷根氏と名乗つた。その後、垂水に移封されるまで、約四〇〇年の長い間、代々此の城を居城とした。その間、此のこの地方は各所に豪族が群立し、互いに勢力を競い合い、興亡を繰り返していたが、敷根氏は、その混乱の中にあつ

て、良く時勢を見極め乗り切り、小国ながらもその所領を全うしたが、天分十七年（一五四八）廻氏（福山）、上井氏と共に島津氏に降った。島津貴久の時である。当時、大隈地方には、強大を誇る肝付氏があり、敷根郷は、島津氏・肝付氏の接点にあり、非常に苦心したが、よく此の天然の要害に拠って二十余年、その境界を守り通して、肝付氏の侵略を許さなかった。島津義久は、特に敷根十四代・敷根中務大輔頼賀の忠誠を賞して、天正三年（一五七五）重富の春華と帖佐の益田を与え、千石を加増している。文禄四年（一五九

転封され、垂野城を居城として、代々市成を領したという。立頼の子、久頼の時には、島津家久の女を室とし、慶安二年（一六四九）光久の代には国家老となって、国政に参与している。久頼の弟・頼行は、土岐氏の家号をついで土岐新左衛門と号し、三男が敷根氏を名乗ったという。

五）豊太閤の命により、石田三成の指揮で、三州の検地があり、それに伴って移封が行われた際、頼賀は垂水の田上城に転封されたので、家臣を引き連れて移った。その後、孫の立頼の時、高隈に移され、更に市成に



長尾城本丸

長尾城略図